マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二（46）　1

足りなかったのは執念

全国高校サッカー選手権はたくさんのことを教えてくれる。

「選手権」は、サッカーをしている高校生が最も出たいと思う大会。県代表になれば県内全チームの思いを背負う責任感や、裏方として大会を支える開催地の選手たちへの感謝の気持ちを学ぶことができる。

指導者も同じ。私は幸い10回出場しているが、その度に気付きが増える。7年ぶりに3位となった今冬は、二つのことを学んだ。

その一つは、指導者としての喜び。

それは、前橋育英高と戦った3回戦でのこと。ドリブルの得意な選手が相手と競り合う場面で何度もパスを出した。強い気持ちがあればドリブルするのに、それができない状態だった。何かで変えたかった。

「遊べー」。つい叫んだ。

それに応えて選手はドリブルを仕掛けた。それからフットワークが軽くなった。

「遊べ」というのは相手に失礼だったかもしれないが、選手は私の意図に気付いて表現してくれた。監督冥利（みょうり）に尽きる瞬間だった。

一方で、青森山田高に敗れた準決勝では、自分に足りないものにも気付かされた。

「負けたのは執念の差だ」

準優勝した流通経済大柏高監督で、習志野高時代の恩師、本田裕一郎先生から言われた言葉が心に響いた。

試合は終盤に追い付かれてPK戦となったが、選手が蹴るコースを相手に研究され、シュートを2本止められた。PK戦は試合ごとに蹴る選手を変えるのが鉄則。分かっていたはずだが、私は蹴る選手を指名しなかった。

青森山田の黒田剛監督は22年も続けて出場し、苦杯も味わってきた。勝利への執念がどの監督よりも強いはず。本田先生は全国制覇を目指す教え子の甘さを指摘してくれた。

全国制覇は選手が言い出したことだが、今は私自身の目標だ。2019年シーズンが間もなく始まる。その前に紙面で、サッカーとともにある私の人生ドラマのホイッスルを鳴らさせてもらう。（聞き手　佐藤智哉）

7年ぶりに3位となった選手権で表彰式に臨む私（後列左から3人目）。指導者として10度目の舞台でも多くの気付きを得た

マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　2

ジーコへの憧れが原点

「尚志らしさ」と言えばパスサッカーだろう。その原点は、私の小学時代にある。

千葉県で生まれた私がサッカーを始めたのは小学2年の時。野球からサッカーにくら替えした4歳上の兄の練習についていったのがきっかけだ。野球にあまり魅力を感じなかったが、サッカーはすぐ好きになった。

兄が通うスポ少に入団できるのは4年からだったが、特別に2年から入れてもらった。「反射神経がいい」と最初はゴールキーパーに選ばれたが、6年の時は試合を組み立てたりシュートを決めたりする選手となった。

毎日、ドリブルをして学校に通うほど、とにかくボールを蹴ることが大好きだった。

家の近くには「ペレ」も住んでいた。

彼はサッカーが上手な大学生で、よく遊んでもらった。私はサッカーの神様、ブラジルのペレにあやかって「ペレ兄さん」と呼んだ。

ペレ兄さんは、私のサッカー熱をあおるものをたくさん持っていた。ワールドカップ（W杯）を特集した雑誌やサッカー番組の録画ビデオ。それに出てくる世界のトップ選手たちはみんな輝いて見えた。

特にわくわくさせられたのが「黄金のカルテット」と称されたブラジル代表のジーコとソクラテス、ファルカン、トニーニョ・セレーゾのプレー。中でもジーコを好きになった。小学生ながらに、彼のさりげないスルーパスが「美しい」と憧れを抱いた。

彼のパスをまねして一生懸命に練習した。そのうち、浮き球やボールをカーブさせて通すパスが得意になった。中学生になるとパスを出して試合を組み立てる中盤の選手として認められ、関東選抜でキャプテンを任された。

高校の時、「浩二」を「ジーコ」になぞらえて、私のスルーパスを「ジーコパス」と新聞に書かれたこともある。最前線の選手にパスを通して得点するのを、サッカーの醍醐味（だいごみ）だと感じていた。

そうした記憶が、素早い判断でボールをパスでつなぐ尚志高のパスサッカーに息づいている。（聞き手　佐藤智哉）

ジーコに憧れ、サッカーに明け暮れていた小学時代の私（右から2人目）。自宅から学校まで約1.5キロの道のりを毎日ドリブルをして通った

マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　3

信じて選んで今がある

人生にはいろいろな岐路がある。生徒たちに後悔しない選択をさせたいと心から思う。

私の場合は習志野高時代の恩師、本田裕一郎先生との出会いが今に導いてくれた。

中学3年の時に関東選抜の主将を務め、それなりに注目され、名の知れた強豪校から誘いがあった。そんな中で、中学の先生に半ば強引に連れて行かれたのが習志野だ。

「南米流のサッカーをやる。来てくれ」

本田先生は私に入学を勧めた。「白いペレ」と呼ばれたブラジルのジーコに憧れていたこともあったが、初対面の先生に人を引き付ける魅力を感じて、習志野を選んだ。

本田先生の指導は新鮮だった。ただ走る練習は一つもなく、常にボールを使った練習をするなど最新のメニューを取り入れた。「今日はどんな練習か」といつも心が躍った。

1年の夏休み前には「アルゼンチンに行くぞ」と言い出した。レギュラーだった私もほかの部員と共に40日間、アルゼンチンに遠征した。アルゼンチン代表が使う施設で練習したり、代表コーチから指導を受けたりした。

南米の選手のサッカーに向き合う姿勢や球際の強さ。世界を垣間見て「プロになりワールドカップ（W杯）に出る」というおぼろげな夢がしっかりイメージできるようになった。

楽しみながらも、青春の全てをささげた高校生活。ユース代表に選ばれ、より高いレベルで実力を磨くこともできた。3年の時、バルセロナ五輪の代表候補にも選出された。

卒業の翌年にJリーグ発足を控え、リーグに参入する多くの球団から誘われた。本田先生に「プロになりたい」と意思表示したが、大学進学を勧められた。当時はまだ大学に進むのがスタンダード。「大学に行ってからでも遅くはない」と切り替えた。

厳しいプロの道を選んでいれば、日本代表になれたと思うこともある。でも多くの人に出会い、育ててもらった高校サッカーは最も良き思い出。本田先生を信じて選択したことで、こうして生徒の成長に関われる素晴らしい仕事に就けている。（聞き手　佐藤智哉）

先日、本田先生㊧と対談させてもらったが、先生は相変わらず新しい高校サッカーを追求していた。70歳を超えても衰えない情熱に感服する

マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　4

初めて挫折を味わった

ずっとスーパースターのままでいたら今の自分はないかもしれない。

高校までは常にチームの中心。国体の千葉県選抜で頑張るとユース世代の日本代表に選ばれ、さらに努力したら今度は五輪代表候補となった。高校3年では2人だけだった。

順大に進学直後の1991（平成3）年、バルセロナ五輪1次予選のインドネシア戦に出場し1点を奪った。その時、私は19歳13日。テレビアニメ「赤き血のイレブン」のモデルとなった永井良和さんが、71年のミュンヘン五輪予選で記録した19歳5カ月15日を抜き、五輪予選の日本人最年少ゴールを更新した。

だが大学に戻ると、ゲームメーカーという本来のポジションで出場する機会が減った。

それは、のちに日本代表の背番号「10」を背負う同学年の名波浩の存在が大きい。名波とは同じポジションを争っていたが、私は、右サイドバックとして起用されることが多くなっていった。

そのせいか。五輪代表も最終予選に私は招集されず、代わりに名波が代表入りした。

名波は「サッカーだけは誰にも負けない」という情熱を持っていた。性格も親分肌で、人を引き付ける力もある。4年の時にはキャプテンを任された。

一方で私は、右サイドバックとしてレギュラーに食らいついていたが、監督交代もあり今まで以上に試合に出られなくなった。それに満足できず、遊びに走り酒に逃げたこともある。人生で初めて挫折を味わった。

教員になった頃、雑誌で「天才同士の争いに敗れて挫折した」と書かれたことがある。確かに当時、名波をライバル視して微妙な距離感があったように思う。でも名波もジュビロ磐田の監督となり、互いに指導者になった今はその距離も縮まっている。

試合に出られなくなり、必死になって練習してポジションを奪い返しまた奪われる。大学時代に苦しい経験をしたからこそ、選手に伝えられる。「試合に出られないやつは努力しないと意味がない」（聞き手　佐藤智哉）

順大時代の私㊧。サッカー人生の中でも不本意な時間を過ごしたが、試合に出られなかった経験が指導者となった今は生かされている